

第6章 知識社会学と言説分析

橋爪大三郎

1 はじめに

本章では、知識社会学と、言説分析とについて、それぞれの方法や社会学としての特徴について明らかにする。

知識社会学(sociology of knowledge, Wissenssoziologie)は、K・マンハイム(Karl Mannheim 1893-1947)の名とともに知られる。G・ルカーチ(György Lukács 1885-1971)の仕事も、その具体例と考えてよいだろう。総じて、マルクス主義の影響下にある研究プランであり、そのキーワードはイデオロギーである。言説分析(discourse analysis)は、M・フーコー(Michel Foucault 1926-1984)が唱えたとされる方法である。

ソシュール以降のいわゆる「言語論的転回」を踏まえたのちの、知識に関する制度論的な分析方法である。この方法は、広い意味での構造主義の影響下にあり、そのキーワードは言説である。言説分析は、社会学よりも広い問題領域のなかから生まれた方法であるが、社会学にも大きな影響を与えている。知識社会学と言説分析には、共通点と相違点がある。

知識社会学と言説分析は、どちらも、知識や観念といった、社会の背後にあって社会を現実的に構成する、不可視な実態について考察する。目に見える具体的な行為から出発することを標準的な方法とする社会学としては、やや異色なアプローチをとっている。人間の知的生産物を扱うものとして、この二つは、代表的な社会学の方法だろう。

相違点としては、両者の扱ってたつ図式の違いがある。知識社会学と言説分析は、異なる時代の異なる状況を背景にした、異なる研究方法である。それに従って、両者の分析の効力も異なっている。両者がどのように異なっているかを理解するなら、それぞれについての理解も深まるだろう。そこで、以下、知識社会学と言説分析、それぞれの方法について詳しくみていこう。

2 知識社会学

知識(knowledge)は、人びとに共通に分けもたれているが、それ以前に、一人ひとりに帰属するもの

である。知識は、組織されて、具体的な認識を構成し、行為をみちびく。

知識社会学の重要なテーマは、どのような場合に、人びとが正しい認識を抱くのかということである。知識社会学は、「真理」の枠組みに従っているのである。

「真理」の枠組みは、知識の外側に現実世界が存在して、それと照合されるという想定に立つ。知識は、主観が抱くものであり、現実世界は客観として存在している。「真理」の枠組みは、そのような、古典的な主/客図式に従っている。現実世界と対応しない知識は、「真理」の資格をもたない虚偽である。知識のあり方は、真理/虚偽の二元論によってとらえられる。

イデオロギー(虚偽意識)は、虚偽である(現実世界と正しい対応を持たない)ことを本質としながら、それでも機能しつづける知識の体系である。知識社会学は、さまざまな知のあり方を、イデオロギー機能との関連で分析していく。

知識社会学は、イデオロギーの概念が、大きな説得力をもつ時代を背景に生まれた。

イデオロギーの概念は、知識の体系が複数存在するという、ある意味の相対主義を前提にしている。そして、それらのうちのあるものが、真理としての、絶対的な優位を占めるという想定に、学問としての根拠を置いている。具体的に言えば、一九世紀にマルクス主義が現れ、それ以外の知識の体系を「ブルジョワ・イデオロギー」として批判した。二〇世紀初めにロシア革命が成功し、この批判は、説

得力をもつようになった。マルクス主義が「真理」であるかもしれないと、「ブルジョワ・イデオロギー」にとらわれた人びとを脅かしていた時期、知識社会学は、切実な関心の対象となった。

イデオロギーの概念は、さらに、主/客図式を前提にしている。イデオロギーが虚偽であるのは、主観と客観とが対応しないからである。ここで主観は、個々人に個別化されている。また客観は、言語を介さずに、直接その実態にふれることができると思定されている。イデオロギーが虚偽であることを絶対的に判定できる手続きが存在するからこそ、イデオロギーの概念が意味をもつのだ。

では人びとは、なにゆえ、イデオロギーを抱くようになるのだろうか。また、ある知識の体系がイデオロギーである(ない)ことの証明は、どのようになされるのだろうか。

マルクス主義は、この問いに、このように答える。まず、現実が意識を規定する。現実とは、人びとがとり結ぶ社会関係(とりわけ、経済的な諸関係)であり、具体的には、農民であり地主であり工場労働者であり資本家であり知識人でありといった、人びとの社会的属性である。現実は、矛盾(利害対立)に満ちている。とりわけ資本主義社会では、ブルジョワ階級とプロレタリア階級の階級対立が、すべてを規定している。この矛盾を克服して、新たな社会を建設すべきプロレタリア階級の認識が、真実の知識であり、打倒されるはずのブルジョワ階級の知識が、虚偽の知識である。両者は、共産主義イデオロギー/ブルジョワ・イデオロギーのかたちで対立するが、どちらが真実で虚偽であるかははっきりしている。マルクス主義の正しさは、歴史実践のなかで証明される。革命が成功し、共産主義

社会が実現することで、やがて証明されるのだ。——これが、マルクス主義の基本的な考え方である。ところで、現実の社会関係が自動的に、人びとの意識を規定するわけではない。むしろプロレタリア階級に属する人びとの多くは、マルクス主義に理解を示さず、ブルジョワ・イデオロギーのとりことなっている。なぜなら、支配階級のイデオロギーが、その時代の支配的なイデオロギーとなるからである。

プロレタリア階級の人びとが、正しい社会認識(階級闘争についての認識)、歴史認識(プロレタリア階級が勝利し共産主義社会が実現するという認識)に至るためには、プロレタリア階級の前進党である共産党の指導が必要である。共産党は、人びとが「真理」に目覚めるための媒介である。共産党には、マルクス主義のイデオロギーを身につけたプロレタリア階級の人びとや知識人たちが多く集まっている。彼らが正しく思考し行動することができるのは、彼らがプロレタリア階級の階級意識を自らのものとし、共産党指導部の指導に従っているからにほかならない。

ここで、イデオロギーの特徴について、まとめておこう。

まず、イデオロギーは、包括的な知識、すなわち知識の体系である。イデオロギーは、経済学や政治思想などの社会科学や、文学や哲学などの人文学や、自然科学さえも含む全体的な知のシステムである。第二に、イデオロギーは、観念のあり方であって、言語ではない。言語を素材にして構成され

ているとしても、イデオロギーの実態は、言語があらわす観念の性質(特に、それが現実世界と対応していないこと)なのである。第三に、イデオロギーは、他のイデオロギーと対抗し、他より優位である(「真理」である)ことを競う。(マルクス主義が自らをもイデオロギーとよぶのは、マルクス主義だけが現実世界と対応した特権的な「真理」であると主張していることからすれば、おかしいのだが、そういう慣用になっている。)

イデオロギーは、社会活動の全体を覆いつくし、人びとの認識を支配し、社会を現状のままに機能させる。どんなイデオロギーも、みずから真理であると考える。それが虚偽だと批判されるのは、異なるイデオロギーとのイデオロギー闘争が生じた場合である。

イデオロギーがこのような性質をもった概念だとすると、イデオロギーについての科学的研究(知識社会学)は、どのように可能になるだろうか。

知識社会学には、二つの可能性があると思われる。

第一は、マルクス主義の主張するように、ブルジョワ・イデオロギーが虚偽であり、マルクス主義が「真理」であると承認すること。すると、知識社会学が、社会について正しい主張をのべる「社会科学」であるためには、それはマルクス主義の一部でなければならぬ。

関連して言えば、レーニンが、社会学を「ブルジョワ科学」に分類したので、問題はいつそう複雑になった。マルクス・レーニン主義の原則に従う社会主義諸国では、大学から社会学が追放された。ソ

連ではむろんのこと、中国でも一九五五年から一九八〇年まで、社会学自体が存在を許されなかった。となれば、もちろん、知識社会学なるものが存在する余地はない。

それはさておき、知識社会学が「イデオロギー」についての科学であるうとすれば、それは、どのようにイデオロギーが生まれ、人びとにわけもたれ、社会のなかで機能し、その虚偽意識としての正体を隠しているかに関する、正当な説明を与えなければならぬ。すなわち、それが「真理」であること(虚偽イデオロギーではないこと)を、保証しなければならぬ。ところが、知識社会学が「社会学」であるあいだは、社会についての包括的な知識の体系であることはできない。ゆえに、それが「真理」であることを保証することができない。したがって、知識社会学は、マルクス主義の一部としての社会学、すなわち、マルクス主義社会学であることで、それを保証する以外にない。

こうして、知識社会学のひとつの可能性は、マルクス主義社会学となつて、イデオロギーに関するマルクス主義の教説をなぞり、その自律性を失っていく道である。特に、この場合、マルクス主義を科学的な考察の対象とすることはできない。

第二は、その反対に、社会学の自律性を守り、マルクス主義もそのほかのイデオロギーと同様に、例外なく批判的な考察の対象とする可能性である。この場合、知識社会学が考察する知識(イデオロギー)に対して、知識社会学それ自身はメタ知識として存在することになる。

このメタ知識の性格をどのように考えるかにより、さらにいくつかの立場が分かれる。ひとつは、

知識社会学それ自身も、ほかの知識(イデオロギー)と同様に、単なる知識にすぎない(決してメタ知識ではない)と認めてしまうこと。そうすると、知識社会学が特権的に真理を独占する可能性は失われ、単に複数の知識の体系が併存していると言えなくなる。こうして、まったくの相対主義が帰結する。もうひとつは、知識社会学がメタ知識であることに固執し、マルクス主義の優位を認めないこと。そうすると、知識社会学が特権的だとは主張できるが、それが、本当に知識(イデオロギー)を正しく説明しているかどうかはわからなくなる。あとひとつは、「真理」の枠組みを放棄し、現実が「意識を規定する」というイデオロギーの基本テーゼをゆるめること。そうすると、知識は現実世界との対応を失って、どうにでも意味づけられ、解釈できることになる。この結果、知識社会学はマルクス主義の優位を認めなくてもよくなるが、そのかわりに、知識を説明するための理論を見失ってしまう。

知識社会学それ自身も、知識である。知識社会学が、知識を分析・研究する一般的な方法であるとして自己主張しようとする、それは、知識が知識を正当化しようとする、自己言及のかたちになる。これは、解けない課題であり、正当化しがたい。

いずれにせよ、知識社会学は、マルクス主義に影響された、独自の方法をもたない試みとみなされることになった。そのため、社会心理学や大衆社会学に比べても、周辺の存在にとどまり、社会学のなかで重要な役割を果たすことができなかつた。

3 言説分析

知識社会学は、二〇世紀のイデオロギー対立と冷戦を背景にしていた。複数の包括的な知識の体系が併存するという、知識社会学の議論が迫真性をもっていた。

冷戦が終結し、イデオロギーを真理/虚偽の二分法でとらえるマルクス主義のドグマが効力を持たなくなつた。入れ代わりに、冷戦後の歴史的現実を反映する、知に関する社会学として、M・フーコーの言説分析がいま説得力をもっている。

言説(discourse, discours)とは、フーコー独自の概念である。これにもとづく言説分析は、フーコーの一連の業績(臨床医学の誕生『言葉と物』、狂気の歴史『知の考古学』、監獄の誕生)を通じて練り上げられていった。

言説は、言語の形態の一種であり、中間的なまとまりをもった秩序である。言語のもっとも小さな単位は、言表(enoncé)という。これは、社会学の最小の分析単位である行為にほぼ相当するもので、これ以上小さな単位に分解できない、ひとかたまりの発話や書字、行為(の記録)などをいう。これに対して、そうした言表が残らず集まった全体、ある時代・ある地域(社会)を満たしている言語的な活

動の全体を、集蔵庫(archive)という。この両極の中間にある、何らかの秩序をもった言表の集合が、言説である。社会学になじみ深い用語で言えば、これは、行為の秩序ある集合である、集団・組織・パーソナリティ・文化・コミュニティ……に相当する、言語の側の秩序なのだ。

言説分析は、このような言説について、考察をすすめる。フーコーの議論の新しさは、言説という独自の対象を発見し、考察の対象としたこと。さらには、その分析方法を工夫して、ある時代・ある社会の知識を総体として問題にする、標準的な手法を確立したことである。

言説分析は、知識社会学や、それまでのそのほかのアプローチと比べて、どのような特徴をもっているのだろうか。

第一に、言説分析は、「真理」の対応説をとらない。

この方法論は、言語と独立に現実世界が存在して、言説に真理/虚偽という性格を付与するとは考えない。そのかわりに、現実世界の観念もまた言説が構成するものであり、したがって、「真理」そのものも言説のシステムの内部で構成されると考える。すなわち、「真理」は、ある言説の制度の「効果」であることになる。

第二に、言説分析は、主/客図式をとらない。

言説分析は、言説を素材にして実行される。知識は、言説のかたちをとって存在しており、言説は主観でも客観でもない。言表はたしかに、特定の主体がうみ出したものであろうし、その証拠は客観のなかに見つかるだろう。けれども、言説(言表の秩序ある集合)は、多数の人びとの言表にまたがったもの(間主観的)でありうるし、言説の外側にそれが対応すべき現実世界(客観)を想定しているのではない。つまり言説分析は、言語の一元的な空間のなかでの、言語による言説の再編成の作業なのである。

第三に、言説分析は、言語でないものの作用を実証する方法論である。

言説分析は、言説の分布の偏りや特有の配列のなかに、言語ではない作用を認める。フーコーは、この作用を「権力」とよぶ。権力は、言説の集合に対する、いわば補集合として要請されている。言説分析は、言説だけを扱いながら、その背後にさまざまな権力の効果を見出す。そして、ある時代・ある社会に特有な、さまざまな権力の作用を具体的に実証していく。

たとえば、主体。言説分析の舞台となる、言語の一元的な空間(集蔵庫)のなかでは、主体が消滅している。主体が言説を生産するのではなくて、むしろ、言説が主体を生産する。これが、言説分析の主張である。主体は、告白の制度とともに、もしくは、一望監視装置とともに、もしくは、狂気の新しい分類とともに、歴史的に形成されたのである。権力が言説を編成し、その効果として主体が生み出された。

またたとえば、真理。真理もまた、言説の制度の内部で生み出される。真理もまた、歴史的に形成

されるのであり、権力から自由ではありえない。

主体や真理のほかにも、さまざまな形象が同様に権力の効果として実証されていく。

言説分析のこうした方法は、どのような問題点を抱えているだろうか。

第一に考えるべきなのは、言説分析それ自体も、言説のかたちでのべられること。すなわち、言説分析も言説には違いないので、ふたたび言説分析の対象となってもおかしくない。言説分析はメタレベルの言説なのか、それとも、分析される言説と同じレベルの言説なのか。

フーコーは、この点をはっきりと述べていないようにみえる。けれども、フーコーの言説分析は、歴史的な方法(すでに効力を失った権力についての研究)なので、研究の対象である言説と権力分析の言説とが同列に並ぶことはないようにできている。時間的落差(これを、考古学的切断という)が、双方を隔っている。知識社会学がメタ知識であることを必要としたように、言説分析もメタ言説であることを、実質的に必要としている。

このため言説分析は、つぎのような限界にみまわれる。言説分析は、あらゆる言説の背後に、権力がはたらいていると想定する。すると、言説分析自身そのものの背後にも、権力が現にはたらいていると想定しなければならない。ところが、その現にはたらいている権力を、言説分析は考察の対象とすることができない。いまわれわれのうえにはたらき、われわれを支配している権力に対して、考察

を加えることができない権力分析は、無力であると言わざるをえない。これは、考古学的な切断にもなる限界である。

第二に考えるべきなのは、言説分析が「理論」をもちえないことである。

言説分析は、発見的(Heuristic)な方法である。どのような言説の配置が見つかり、そこからどのような権力の作用が実証されるかは、研究を進めてみるまではわからない。また、ある言説分析がある結果を導いたからと言って、それが、別な言説分析の試みを制約することはない。すなわち、言説分析は、方法ではあっても理論ではないのである。

ここで、理論とは、具体的な研究に先立って組み立てられている、予測のことをいう。たとえば、物理学なら、研究に先立つ理論的予測があって、研究はそれを実証する。その予測(仮説)は、同時代の研究者の多くに共有されている。けれども、言説分析の場合、研究者は、言説みずから語りだすことがらを、毎回「発見」するのである。また、フーコーが、世界を理解するエピステーメーのあり方を考察して、古典主義時代/それ以降、という時代区分を発見したとしても、その同じ時代区分が、別な研究、たとえば小切手の社会史でも実証される保証はどこにもない。むしろ、これまでの研究とは異なる言説の配置が発見された場合のほうが、研究の価値が高いのである。

言説分析が「理論」をもたないということは、研究が進めば進むほど、言説分析の描き出す世界がますます複雑になっていくということである。マルクス主義であれば、経済的な関係がもつとも重要で

あり、政治的な関係がこれに次ぎ、……という序列があった。そして、すべての研究が、秩序づけられた。それは、マルクス主義の理論があったからだ。言説分析は、さまざまな言説のあいだに価値序列をつけることをしない。むしろ、価値序列をつける議論も、理論も、やはり言説だとして相対化していく。

第三に、言説分析は、言説がどのように、またなぜ変化していくか、語りえないことである。

このことは、いまのべた点(言説分析が「理論」をもちえないこと)と関連している。時間の経過にしたがつて、言説の配置が変化していくことがわかった。それは、権力の作用が関係しているのかもしれない。けれども、言説分析は、言説ではないものについて、直接に語る手段をもたない。そこで言説分析は、権力の痕跡を見出し、権力が作用したことを実証することができるだけで、なぜ権力がそのように作用するのか、のべることはできない。また、言説の配置がなぜ、時間の経過にしたがつて変化していくのか、理由をのべたり予測したりすることもできない。

第四に、言説分析は、容易に通俗化しうることである。

言説分析は、どの研究が価値がありどの研究が価値がないかを、区別する基準や根拠をもたない。その言説を生み出した人びとが抱いていた意味や価値観と無関係に、それを外側から考察する。歴史学者は、文字資料を説明しようとする。それに対して考古学者は、文字資料をあたかも文字資料ではないかのように、そのほかの遺物と同様に扱う。言説分析には、言説に対する一種のイリテラシー、

「考古学的切断」が仕組まれている。

こうして、言説分析は、どんなにささいな対象でも研究の主題に選ぶことができる。そして、その対象についての「理論」を無視して、「分析」を行なうことができる。たとえば、労働運動についての経済学・社会学的分析を行なうかわりに、労働運動についての言説を集めて分析する、など。はなはだしい場合には、単に言語資料を「言説」と呼びかえ、ジャーゴンをまぶしただけの安直な「言説分析」が、むやみに生産されている。

言説分析が、フーコーの個人的でオリジナルな研究プランであることを越えて、広く社会学に受容された背景を考えてみよう。

冷戦が続いていた当時、社会学は、潜在的な対抗理論、マルクス主義の存在を意識していた。そのため、構造—機能分析のような「グランド・セオリー」が生み出され、支持された。知識社会学は、こうした真理をめぐる争いの時代に適合した思考のフレームであった。

構造主義、そしてポスト構造主義の発展は、マルクス主義が影響力を失う時期と重なっている。真理をめぐる争いはどうでもよくなり、世界を把握するたつたひとつの見取り図が存在するとは信じられなくなった。このようなとき、言説分析が歓迎されたのは、つぎのような理由からである。

第一に、言説分析のフレームに従えば、「科学的で実証的」な研究が確実に実行できること。素材と

なる言説を集めたら、あとは分析をすればよい。第二に、言説分析のフレームに従えば、研究テーマが簡単にみつかること。ほとんどすべての概念やトピックは、歴史的に形成されたものであり、言説分析の対象にできる。第三に、言説分析のフレームに従えば、研究の動機や有用性が稀薄でも、研究を続けるのに差し支えないこと。ポスト冷戦の時代、はつきりした問題意識で研究を行なうことはますます困難になっているが、そういう場合でも言説分析なら、とりあえずとりかかれる。などなど。要するに、言説分析は、一九八〇年代以降の相対主義的で混乱した精神状況にマッチしたのである。

4 言説分析以降

言説分析は、このように、容易に通俗化するものだとしても、その本来の動機と可能性は十分に評価すべきものだと思う。

啓蒙思想から実証主義へ、さらにマルクス主義、言説分析へと、知識についての研究が歩を進めてきたことには必然性があった。これらを経て、いまわれわれは、言説分析のつぎの段階に踏み出すべき地点に立っている。

言説分析について考えてみるべきなのは、言説と行為との関係であろう。

言説分析は、すべてを言語空間のなかで問題にしよう(あるいは、言説だけを分析しよう)とする。これに対して社会学は、伝統的に、行為を考察の基本単位としてきた。もしも行為が言説に含まれるのなら、社会学は言説分析に包摂される。いつぼう、もしも言説が行為に含まれるのなら、言説分析は社会学に回収される。もしも、言説と行為が重ならないのなら、言説分析と社会学の関係をはつきりさせなければならない。

言説は、行為をほぼカバーする概念ではある。行為は、ウェーバーが考えたように、有意義な身体の挙動である。行為の意味は、観察する第三者に理解できるもので、それを記述したり記録したりできる。こうして行為の意味をのこらず言語に置き換えることができるのなら、言説として行為をとりえることは不自然ではない。

けれども行為は、言語とすつばり重なる概念ではない。言語は、言葉を発する行為(発話行為)や書字行為なしには存在できないが、それにしても、行為と言語は異なったものである。行為が言語に還元できないレヴェルの現象であるのなら、行為を言語によって説明しようとする「理論」(すなわち、社会学)が、言説分析とは異なったものとして、存在する理由と権利があることになる。

J.L.オースティンの発話行為論(speech act theory)は、言語が行為にどのように結びついているかを明らかにした。言語はこれまで、出来事の外にあつて、世界について「記述」するだけのように考え

られてきた。しかし発話行為論は、「命令」「約束」「宣告」のように、出来事をうみだし、世界を構成することも言語のはたらきであるとする。言葉を話すことそれ自身が行為であり、それ以外の行為に特定の効力をおよぼす。そうやって、言語は行為と結びついているというのである。

オースティンの指摘は、その通りであろう。けれども、発話行為論では、まだ不十分である。言語を生み出す個々の発話行為が、そのほかの行為に結びついていることはわかった。でも、発話行為ではないそのほかの行為は、言語とどのような関係にあるのか。言語と行為の関係について、発話行為論は部分的にしか語っていない。

言語と行為は、どう関係するのか。それは、どちらも、規則(ルール)に従うものであるという点だ。言語と行為とを共通に、規則の観点からとらえたのは、L.ヴィトゲンシュタインである。後期のヴィトゲンシュタインは、言語や行為を含め、人間のふるまいはどれも言語ゲーム(Language game)であるとした。言語ゲームについて、詳しくは私の『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン——』(一九八五、勁草書房)、『言語派社会学の原理』(二〇〇〇、洋泉社)、『心はあるのか』(二〇〇三、ちくま新書)を参照ねがうとして、以下、それがどのような新しい展望を与えるのかをのべよう。

行為が意味をもち、理解可能であり、効力をもつのは、それが規則に従っているからである。言語も意味をもち、理解可能であり、効力をもつのは、それが規則に従っているからである。行為も言語も、どちらも規則(ルール)に従っているという点で、両者のあいだには明確な並行関係がある。

規則はさまざまであり、それに応じて、人びとのふるまいもさまざまである。そうしたふるまいの一つひとつを、ヴィトゲンシュタインは「言語ゲーム」と名づけた。この名前のせいで、これを、もっぱら言語と結びついた活動だと考えてしまつては、誤解である。そうではなしに、言語ゲームは、むしろ行為の概念に近い。行為や言語をふくむ、もつとも一般的な人間のふるまいの総称である。

となれば、言語ゲームは、言説の上位概念であることがわかるだろう。言説はどれも、なにがしかの規則を前提にしており、ある言語ゲームのなかでうまれるものだからだ。また、言語ゲームは、行為の上位概念でもある。行為はどれも、規則を前提にしている。ある特定の規則にしたがった行為の集まりが、言語ゲームである。このようにして、言語ゲームを通じて、言語と行為は結びついている。

そこで、行為と行為の関係、行為と言語の関係、言語と言語の関係をはつきりさせるには、言語ゲームと言語ゲームの関係に注目すればよいのではないか。こう考えて私は、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームのアイデアを拡張し、「言語ゲーム論」(言語ゲームをモデルとする社会理論)を構想した。

言語ゲーム論によると、言語は、ある言語ゲームのなかで営まれている。そして、ある言語ゲームともうひとつ言語ゲームが関係する場合にも重要な役割を果たす。たとえば、ある言語ゲームの規則に、もうひとつの言語ゲームが言及する場合。この場合、前者の言語ゲームを一次ゲーム、後者を二

次ゲームという。

社会は、さまざまな言語ゲームの集積である。いくつもの言語ゲームが、言語のはたらきを媒介に、さまざまに複合し、社会の全体をかたちづくっていく様相を、こうして再構成することができるだろう。

言語ゲーム論を踏まえてみると、言説分析の権力の概念は、考え直したほうがよいように思える。

言説分析は、①対象のすべてを言説とみなし、②言説の分布を調べ、③分布に偏りがあれば、そこに権力の作用を認める、という手順を踏む。このやり方では、言説の外側にあつてなにかの作用をもつものは、すべて権力ということになってしまう。

けれども、言語ゲーム論によれば、言説の外側には、さまざまな言語ゲームが堆積しており、言語や行為のさまざまな効果が積み重なっているのである。そのなかのあるものを権力と定義すべきであつて、そのすべてを権力と考えるのは適当でない。

言説分析は、言説と権力を補集合の関係と考えることによつて、いたるところに権力を発見する。それは、「つねに権力に関心も持ち続けているぞ」という「良心」の自己満足か、「どうあがいても権力から逃れられない」という無力感をもたらす。どちらも、見当外れである。言説の外側には、人びとの規則に従つたふるまいがあり、歴史的な偶然や必然によつて築かれたさまざまな制度がある。そ

れらは、社会が成立するための条件なのであつて、忌むべき権力ではない。そうした条件が成り立たなければ、そもそも個人の自由もないのだ。

権力をどう定義し概念化すればよいかは、開かれた問いである。それでもはつきりしているのは、言説分析のやるように権力を概念化したのでは、社会学にならないということである。

本章は、知識をめぐる社会的な考察のうち、知識社会学、言説分析に焦点を絞つて、その達成と問題点を論じた。知識に関する社会(科)学的考察が、これに限らないことは言うまでもない。そしてこれからも、新たな試みがうまれることであろう。本章の読者が、その挑戦的な課題に取り組むか、少なくともその理解者であることを望みたい。

文献

Austin, J. L., 1962, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press. 1978年、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店。

Foucault, M., 1969, *L'archéologie du savoir*, Paris: Gallimard. 1981年、中村雄二郎訳『知の考古学』河出書房新社。

Mannheim, K., 1936, *Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul. 1979年、高橋徹・徳永恂訳『イデオロギーとユートピア』世界の名著88 マンハイム オルテガ』中

央公論社。

Lukács, G., 1923, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Malik 1968年、城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社。

"Sociology of Knowledge and Discourse Analysis," by Daisaburo Hashizume, March 2003.